

保存活動

美術作品を保存し、後世に伝えていくことは、美術館の持つ重要な機能の一つである。美術館は単に作品を公開するだけでなく、人類の文化遺産たるべき文化財を、適切な形で管理していかななくてはならない。

当館では日常のビル管理、展示室での監視業務に加え、作品への虫菌害対策として、幾つかの活動を行っている。

展示室・収蔵庫燻蒸

作品が恒常的に設置される場所である展示室、収蔵庫をそれぞれ、殺虫・殺菌処理している。展示室は作品が展示されていない休館期間を選び、ピレスロイド(エンペントリン)炭酸製剤により殺虫する。収蔵庫燻蒸は長期の休館期間を選び、臭化メチル・酸化エチレン製剤による殺虫・殺菌処理を行ってきた。当館収蔵庫は複数箇所にあるため、年度ごとに異なる箇所を燻蒸している。本年度は本館の収蔵庫で実施した。

環境調査

日本は高温多湿であり、その文化財は虫菌害を受けやすい。短時間で確実な殺菌殺虫を行なうことの出来る臭化メチル・酸化エチレン製剤が、我が国の博物館・美術館で広く歓迎されてきたのは、まさにこの理由による。が、1997年のモンリオール議定書締約国会議において、先進国では2005年に臭化メチルを全廃することが決定し、1999年から削減が始まっている。当館でもこの流れを受け、大規模な燻蒸を行わずに作品の展示収蔵環境を保全する体制を模索してきた。

その過程で有力になってきたのが、IPM (Integrated Pest Management、総合的有害生物管理) と呼ばれる考え方である。これは、大規模な燻蒸に頼る従来の方法を改め、環境を改善することで有害生物を施設内に入れず、カビ等の発生を防ごうとするものである。この一貫として当館でも、平成12(2000)年度より外部の委託業者による施設の環境調査を、年3~4回行ってきた。調査するのは

害虫の生息状況
空中の浮遊塵
空中の浮遊菌
付着菌

等の項目である。の項目については、当館は極めて清浄な環境を維持しているが、については注意を要する。これは施設周囲に緑が多く、文化財害虫にとってもまた良好な環境になっていることによる。当館ではこれらの調査に基づき、害虫の侵入経路と思わ

れる箇所の遮断等を行なっている。

本年は調査の結果に基づき、1階正面エントランス、1階レストラン横エントランス、2階エントランスの自動ドアに、ドアスプレーを設置した。これにより、虫の侵入経路と思われる隙間を封鎖し、効果を上げている。

環境の調査は外部委託するのみではなく、館の職員によるものも適宜実施している。

普及活動

大規模燻蒸によらない保存環境保全のためには、施設に携わる者全員の参加が欠かせない。環境をチェックする目が多い程、より多くの情報を集積することが出来るからである。本年度は当館ボランティアや、展示室で監視業務に就くミュージズスタッフへの研修を行ない、保存活動への意識を高めるよう努めた。学芸課内には保存ワーキンググループを設置した。また博物館実習のテーマとして「文化財の保存・公開」を設定することで、美術館外部に理解を求める試みも行われた。

大規模な保存活動の経過

5月12日(月)、19日(月) ドアスプレー設置
6月9日(火) 外部業者環境調査第1回目
7月17日(水)、18日(木) 展示室燻蒸
7月28日(月)~8月2日(土) 博物館実習
8月26日(火) 職員による害虫トラップ設置
10月14日(火) 外部業者環境調査第2回目
12月10日(水)~16日(火) 本館収蔵庫燻蒸
3月15日(月) 外部業者環境調査第3回目